

日本古来の製鉄法「たたら製鉄」の普及に

室蘭登別たたらの会

灼熱したマグマのような流動物が、1500℃に燃える炉の隙間から、ドロドロと流れ落ちる。

「これが、『ノロ』と呼ばれる不純物で、鉄の製造過程でできるのです」

日本古来の製鉄法である「たたら製鉄」の普及を目指し、「室蘭登別たたらの会」を設立した石崎勝男さん（66）が説明する。



炉の隙間からマグマのようなノロが出る

ノロを出し切ると、次の段階に進む。今度は、レンガで造った高さ1mほどの炉をハンマーで叩き壊す。内部で燃えている鉄を取り出す作業だ。

石崎さんが、ハンマーを打ち下ろすと、

辺りの冷たい空気と炉内の高温とが混ざり合い「じゅわぁ」と熱気が立ち上った。

砕けたレンガを掻き分けると、炎を放っている木炭とは明らかに違う別な塊が、真っ赤に燃えていた。

「これが、たたら製鉄で出来る鋳（けら）です。いわば、鉄のお母さんみたいなものですね」

そう、石崎さんが指差した。

「鋳は『金』（カネヘン）に『母』と書きます。炉の中で鉄ができるのは、母親のお腹の中で子供が大きくなるようなものです。ですから、鋳は昔から安産のお守りにされてきたのですよ」

鋳の出来を確かめながら、石崎さんは笑顔を見せた。室蘭市輪西公園で行われた「アイアンフェスタ」の会場である。

アイアンフェスタとは、室蘭市の若手有志が、「鉄の町で、鉄を題材に何かやろう！」と2004年から始めたイベント。鉄と人との身近な関係を探ることをテーマに、たたら製鉄だけでなく、ものづくり体験やアート展示、鉄分を含んだ食品の試食会などが毎年行われている。

年々規模が拡大しており、2012年11月10日に行われた同フェスタは、室蘭港開港140年、市制施行90年の記念行事となったこともあり、たたらの会だけでなく、室蘭工業大学、東北大学、新日鉄住金室蘭製鉄所が参加、前年まで1基だった炉を5基に増やし、これまで以上に大規模に行われた。

石崎さんは、このフェスタに毎年参加、たたら製鉄の実演をしている。

「鉄の町、室蘭だからこそ、たたら製鉄の魅力や歴史を、多くの人に伝えたいのです」

石崎さんは熱く語る。

■ 地元の子どもたちに見せたい

石崎さんは、現新日鉄に46年間勤め、高温の炉の前で、耐熱服に身を包みながら作業を行っていた。以前から鉄に関心を持っており独自に研究していたが、10年ほど前に、あるイベントでそうした鉄を目にする機会があり、一気に興味を持ったという。

つい40年ほど前まで、地元室蘭の砂鉄が広く利用されていたことを、もっと知らせたいと、2009年から「たたらの会」を設立。まずは、地域の子供たちに見せるべきだと、自宅裏にたたら場を構え、鉄造りを独自に始めた。

「古来の製鉄法に興味を持っていて、

退職したのを機に、もっとやってみようと思ひまして。特に、子供たちに見せてあげたいと思ひました。ここで生まれた子供たちに、見せられれば、この町の鉄の歴史について、何か少しでも心に残せるかもしれない」

さらに、室蘭工業大学の研究生に協力したり、小学校の特別授業で教えたり、アイアンフェスタなどのイベントで実演したりして、その活動の幅を広げていった。

2011年からは近所の有志を募り「室蘭・登別たたらの会」を設立。現在会員4人と少数精鋭だが、イベントや課外授業で年間十数回の実演を行うほか、室蘭市民活動センターで講習会や展示会なども実施、本格的に「たたら製鉄」の普及を行っている。



小学校の課外授業で「たたら製鉄」を実演

■ すべて地元の材料で製鉄

たたらとは、漢字で「踏鞴」（たたら）と書く。もともとは足で踏んで空気を送る大型の装置のこと。この装置を使った炉もたたらと称されるようになり、そうした製鉄法が「たたら製鉄」と呼ばれるようになった。「たたら製鉄は、時間と手間がかかるのですよ。準備の時間も入れると一週間ぐらいかかります。全部地元の物を使って、まず材料集めを始めますから」

石崎さんが、その製鉄法を説明する。

原料となる砂鉄は、室蘭のイタンキ浜で採取、磁石を使って何度も選別するという。炉を造るための粘土も地元の浜で採り、木炭は白老のナラ材（どんぐりの木）を利用する。材料を集め終わると、その次は炉を造る。レンガを積み上げて、その内側に粘土を塗り込み、乾燥させて固めるまで、丸一日。「良い鉄造りには、良い炉が欠かせないですから」と強調する。

炉が出来上がると、まず炉を3時間ほど空焚（からだ）きして、炉内の温度を上げる。その後、中に木炭と砂鉄を交互に入れ、5～6時間は焚き続けて、砂鉄を溶かして鉄を作り出す作業を行う。

そして、ふいごで風を送って、炉内を千数百度まで加熱。レンガ炉の上から燃え上がってくる炎の色を目安にして、炉の中の温度を調節する。このため、火が

よく見える夜間がやり易いようだ。

ドロドロとしたマグマのようなノロを出して、最後に炉を壊す。中で精製されるのが鉾であり、アイアンフェスタのときには9キロの鉾が出来たとのこと。その鉾の塊が冷え、切断すると、その断面は銀色に輝くという。

「品質の良い鉾は玉鋼（たまはがね）として、日本刀の材料になります。ただ、これで私が日本刀を作ってしまったら、違法となってしまうので……、小さい包丁やペーパーナイフなどなら大丈夫ですから」と、苦笑する。



鉾（けら）の断面を見せる石崎さん

■ 出来たての鉄の輝きが魅力

「たたらでは、必ず鉄が出来ると限りません。炉を壊して開けてみるまで分からないのです。それに、一つ一つ同じ鉄は出来ません。だからこそ面白くて、取り出すときの緊張感や期待感、出来たての鉄の輝きがたまりませんね」

出来の良いものや、ユニークな形の鋳は、イベントで展示するために名前を付けているという。

「この断面、龍に見えませんか？ 今年（2012年取材）は龍年ですから、縁起ものです。絆龍（きずなりゅう）と命名したのですよ」

龍にも見える鋳を両手で持ちながら、石崎さんは目を輝かせていた。



■ 連絡先

〒059-0024 登別市緑町 2-13-17

室蘭登別たたらの会

代表 石崎勝男

TEL/FAX：0143-85-1179